平成２５年度　教員研修モデルカリキュラム開発プログラム報告書
（大学と教育委員会の連携・協働による研修カリキュラム開発事業）

国立大学法人　愛知教育大学

１．目的

「学び続ける教員像」の確立に向け、教員研修プログラムを開発するニーズが高まる中、本学は、平成16年度の愛知県総合教育センターの「10年経験者研修」を２教科担当したことを契機に徐々に拡大し、平成23年度には22名の教員が12教科を担当するまでに発展し、大学での養成と教育委員会による研修とを繋ぐ役割を果たしてきた。平成22年度には、愛知県総合教育センターと「連携・協働に関する協定書」を取り交わし、組織的･計画的な教員養成カリキュラム及び教員研修プログラムの構築をめざしている。

本開発プログラムは、このような連携の実績をもとに教師の教師力・授業力の向上を図り、「学び続ける教員像の確立」に向け、10 年研修において教科に関する「新しい教材、新たな題材」に着目した研修を共同開発する。

２．プログラムの概要・特徴

① 10年研修において教科に関する「新しい教材、新たな題材」に関する話題を取り上げる。
② 教員の教職意識の変容過程を検討するために「教員の自己評価」に工夫を試みる。
③ 『大学知』による学びの変化を期待するカリキュラム構成とする。
④ コンテンツと研修技法に焦点をあて、全教科にわたって教員研修プログラム開発を行う。
⑤ 「学び続ける教員」の研修体制の確立をめざす。

３．計画

小・・・小学校　　中・・・中学校　　高・・・高校

時期等	内　　容	目　　的
7月29日	対象：高 講義・協議：「教師発達について」 （講義・協議内容） ① 教師力量形成研究の知見をもとに教師発達の方向性や特徴について講義する。 ② 受講者から事前に提出された「体育に関するQ&A」から課題を取り上げ、解決策について協議する。 ③ 教育実践場面のVTRを視聴し「フリーカード法」によって分析し、分析結果をもとに協議する。	教師の在り方を「終生、発達途上」と考え、自らの力量的スタンスを自覚させる。 他者との創発的な知恵の生成が実践上の課題を解決する方向に向かうことを自覚させる。 授業実践をとらえる枠組が偏向していることを自覚させる。
7月30日	対象：高 講義･協議：「授業アイデアワークショップ、授業分析」 （講義・協議内容） ① 学習指導要領の趣旨を反映する教材観、授業づくり、指導法について新たなアイデアを提供する。 ② 観察フレームを構成する質的授業分析を行い、分析結果を	受講者のもつ標準的な授業イメージの刷新及び体育授業における常識破壊を試みる。 授業観察のズーム調整を自律的にできる能力を育成する。

	グループ内で提示しながら協議する。	
7月31日	対象：小・中・高 講義：「社会科教育における指導と評価について」 （講義内容） ①社会科の問題は、答えが一つではない（答えが一つではない問題） ②社会科の問題は、一人で解決しない（友だちと一緒に考える問題）社会科が担う市民的資質は、複数の人間たちの対立を民主的平和的に乗り越える資質 ③社会科の問題は、身近なところから世界の問題につながっている ④答えが一つではない問題の場合、多様な視点を生徒から学ぶ現場の声から改善された評価の４観点	社会科において指導と評価の一体化という視点から、生徒主体の学習活動を企画・実践するための基本的な理論を深めると共にそのための技能を高める。
7月31日	対象：小・中・高 協議：「私の授業への取組」 （協議内容） 新学習指導要領で求められている「問題解決的な学習の充実」に関する自身の実践を報告し、全体で協議することにより、授業を振り返り、客観化する視点を磨く。その際、「新たな教材を創造する」とはどういうことか、「新たな教材を創造する」ために必要な要件は何か、その必要性について議論をする。	新学習指導要領が求めるものを考慮しつつ、優れた教材実例から常に学ぼうとする意欲が高まるように教員を支援する。
8月1日	対象：小・中 講義：「新課程で求められる小・中学校・国語科授業づくりと評価」 （講義内容） 全教科の中核となる言語力を軸に、小中学校（高校）の系統性、教科を横断した「教育課程」「教材」開発と評価について模擬授業・実践事例等を通じて提案する。	「21世紀にふさわしい学び」とは何か、教材・授業・評価開発等について、伝統文化、メディア（情報・データ）リテラシー、批評力育成等の方法を理解する。
8月6日	対象：小・中・高 講義・協議：「音楽教育の在り方」、「授業構想」 （講義･協議内容） 音楽科を対象とした様々な調査の結果を紹介する。これを基にして、教科としての音楽科のあり方や学習指導要領を反映した授業の構想について議論する。	学校内外から音楽科がどのように評価されているのか現状認識した上で、一教科としての授業を構想する意識を持つ。
8月7日	対象：小・中・高 講義・協議：「授業案と評価」 （講義･協議内容） 指導要領を反映させた評価規準を設定する方策や、活動内容と評価をリンクさせた具体例を紹介する。	技能教科である音楽科における評価方法を再構築する。 「計画的臨機応変を支える授業案」という意識を持ち、将来的に若手教員等へ適切にアドバ

	演習：「授業づくりと実践アイデアワークショップ」 （演習内容） 　紹介した方策や事例を基にして、実際の指導場面へ活用する方法やアイデアを受講者同士で話し合い、模擬授業の形で発表する。	イスできるようにする。
8月7日	対象：高 講義：「情報教育の今日的課題」 （講義内容） 　「教育の情報化の手引き」（文部科学省、2010）を基礎的な資料とし、その後の社会的なトピック等を採り上げるなどしながら、情報教育の今日的課題を明らかにする。 　これら課題に対して相互に検討を行い、内容を深める。最後にこれらを活かした授業の案を検討して発表する。	情報教育の今日的課題を明らかにすることによって、情報教育をとおして教育の情報化に対する教員の資質向上をはかる。
8月8日	対象：小・中 講義：「家庭科内容の現代的な捉え方」 （講義内容） 　衣食住のグローバル化や福原発事故による食品汚染などの新しいテーマについて、またその探究方法について、ワークショップにより学ぶ。 協議：「家庭科の授業づくり」 （協議内容） 　グループで上記のテーマで単元と１時間の授業を構想してもらい、模擬授業を行う。 　どのようにテーマを子どもたちと探究する必要があるのか、子どもの対話・討論をどのように行う必要があるのか、方法について議論し、検討する。	子どもたちが現代生活と課題について、自分の見方や考え方を捉え返し発展させていけるように、教材や実験・実習・調査などの活動を開発し、対話や討論を構想できるようにする。
8月8日	対象：中 講義：「技術科教育のめざすもの」 （講義内容） 　新学習指導要領を理解し、技術科教育のめざすものについて理解を深め、授業改善の課題を見つける。 ・「題材開発と指導の工夫」について協議する。 ・諸外国の技術教育について紹介する。 ・技術教育における安全衛生教育について協議する。 （実習内容） 　ノコギリや糸ノコ盤等の工具や機器の使い方を再確認しながら、愛知県の山林から産出する間伐材で木製品（教材）を製作する。	新学習指導要領に準拠し、さらにＥＳＤ（持続発展教育）活動の理念を含んだ教育の充実と展開に寄与する。

8月8日	対象：小･中 講義：「自分の実践を変える視点」 （講義内容） ① 職能発達に関する知見を応用した「経験知」形成のメカニズムについて講義する。 ② 師力量形成研究における発達ステージモデルについて講義する。 演習：「授業分析とワークショップ」 （演習内容） ① 体育実践場面のVTRを視聴し「フリーカード法」によって分析し、分析結果をもとに協議。 ② 新学習指導要領の趣旨を反映する教材観、授業づくり、指導法について新たなアイデアを提供する（個人的スポーツ領域）。	教職経験年数以外のファクターに注目した経験知形成について理解させる。 他者との創発的な知恵の生成が実践上の課題を解決する方向に向かうことを自覚させる。 授業実践をとらえる枠組が偏向していることを自覚させる。
8月8日	対象：中 講義・実習：エネルギー変換の技術、電気分野の指導の在り方と実習 （講義内容） 「エネルギー変換の技術」の基礎・基本としての電気分野の指導の在り方について協議する。 ・電源と負荷、発電機と電動機、蓄電について講義する。 ・電気教育における安全衛生教育について協議する。 （実習内容） 永久磁石から出入りする磁力線の通り道を意識したリニア・モーターカーを製作する。前進・後退のための電気回路も作る	新学習指導要領に準拠し、さらにＥＳＤ（持続発展教育）活動の理念を含んだ教育の充実と展開に寄与する。
8月9日	対象：中 講義･実習：『生物育成』における指導の在り方 （講義内容） 『生物育成』における指導の在り方」についての講義と協議を行う。 ・「題材開発と指導の工夫」について協議する。 ・栽培教育における安全衛生教育について協議する。 （実習内容）土つくりについて実際に実習を行い、栽培・農業の基礎基本について学ぶ。	新学習指導要領に準拠し、さらにＥＳＤ（持続発展教育）活動の理念を含んだ教育の充実と展開に寄与する。
8月9日	対象：小･中 講義：「Ｑ＆Ａ及びワークショップ」 （講義内容） ① 受講者から事前に提出された「体育に関するQ&A」から	実践上の問題を問題としてとらえる視点の偏向について自覚させる。 受講者のもつ標準的な授業イ

	課題を取り上げ、解決策について協議する。 ② 新学習指導要領の趣旨を反映する教材観、授業づくり、指導法について新たなアイデアを提供する（個人的スポーツ領域）。 講義・演習：「運動観察とワークショップ」 （講義･演習内容） ① 運動動形態学における運動カテゴリーについて講義する。 ② 観察フレームを構成する質的授業分析を行い、分析結果をグループ内で提示しながら協議する。 ③ 新学習指導要領の趣旨を反映する教材観、授業づくり、指導法について新たなアイデアを提供する（個人的スポーツ以外の領域）。	メージの刷新及び体育授業における常識破壊を試みる。 授業観察のズーム調整を自律的にできる能力を育成する。
8月9日	対象：中 講義・実習：『エネルギー変換の技術』の基礎基本として機械分野の指導の在り方と実習 （講義内容） 「エネルギー変換の技術」の基礎・基本としての機械分野の指導の在り方について協議する。 ・材料力学、・機構学、・材料力学実習について講義する。 ・「題材開発と指導の工夫」について協議する。 ・機械教育における安全衛生教育について協議する。 （実習内容） 形状を記憶して、変形した後も一定の温度になれば元の形状に戻る金属、いわゆる形状記憶合金で動く製品を製作する。	新学習指導要領に準拠し、さらにＥＳＤ（持続発展教育）活動の理念を含んだ教育の充実と展開に寄与する。
8月19日	対象：小 講義：「生活科･学習指導要領改訂のポイント」、 （講義内容） ① 科学的な見方・考え方の基礎を養うとは ② 生活科における言語活動の充実のポイント ③ 「自分自身への気付き」の重要性について 演習：「講義内容に関する実践事例の検討と教材紹介」 （演習内容） ① 学的な見方・考え方を養うおもちゃづくり（ワーショップ） ② 「自分自身への気付き」を焦点化した実践事例の紹介と検討（話し合い）	今回の改訂で、学年の目標に追加された「自分自身の気付き」に関して、すべての内容での目指すべき事項について、理解を図る。また、「改善の具体的事項」に記された「科学的な見方・考え方の基礎を養う」「言語活動の充実」について、ワーショップや実践事例を基にした話し合いから認識を深める。
8月23日	対象：小 演習：「模擬授業」 （演習内容）	新学習指導要領で求められている「問題解決的な学習の充実」について、お互いに切磋琢磨

	問題解決的な学習の充実をめざし、「新たな教材を創造する」点に焦点をあてた模擬授業の発表をグループごとに行う。発表しない班は、児童役となり、積極的に参加・協力をする。模擬授業の発表後は、他の班からの質問に答え、意見や感想を聞き、講師から助言を受ける。	しながら、優れた授業を範とし、学ぶことの意義や効果を教員が実感できるよう支援する。
8月26日	対象：小･中 実習：「ＩＣＴを活用した授業」 （実習内容） A.「大画面」を生かした授業の工夫について (1) 教師用デジタル教科書の利用 (2) 自分で撮影した静止画や動画の利用 B. タブレット端末をグループでの実験･討議に生かす方法について (1) 作図ツールGCを使った模擬授業 C. グループ別の指導事例作成と発表	既存の機器やコンテンツを適切に生かすための知識・スキルを習得する。 数年後に利用可能になると思われる機器を使った授業像について知る。
8月26日	対象：小・中 講義：「表現運動・ダンスの内容と指導のポイント1 （講義内容） 学習指導要領に対応した表現運動・ダンスの特性や指導内容を理解し、指導法について考えていく。また、実際の授業映像を用いながら、授業に活かせる指導スキルを解説する。 実技：「リズムから表現へ～表現運動・ダンスの指導～」 （実技内容） リズム系と表現・創作系の2つの内容を取り上げ、導入から展開を中心にダンスの指導法を提案していく。リズムは自由に踊るロックやヒップホップの教材、表現はものを使った教材を紹介する。	講義では、表現運動・ダンス指導の際に必要な知識を押さえ、指導力向上を目的とする。 実技では、ダンスに必要な技能を身につけ、具体的な指導方法を理解することを目的とする。
8月27日	対象：高 演習：「ダンスの内容と指導のポイント　ダンスの指導とその技法」 （演習内容） 講義は、今年度から完全移行となる学習指導要領に対応したダンスの特性や指導内容を中心に、実際の授業映像を用いながら授業に活かせる指導スキルを解説する。 実技はリズム系と創作系の2つの内容を取り上げ、自由に動きを引き出す教材を紹介し、ダンスの指導法を提案していく。	講義では、ダンス指導の際に必要な知識を押さえ、指導力向上を目的とする。 実技では、ダンスに必要な技能を身につけ、具体的な指導方法を理解することを目的とする

４．実施状況

算数･数学科

１、目的

算数・数学科における今日的課題、特に、算数的活動・数学的活動を通した学習活動の構成に関して理解を深め、具体的な学習指導案の作成等を通して指導力の向上を図ることを目的とした。

２、実施内容

（１）算数・数学的活動を通した学習の具体化(講義)

まず、算数的活動・数学的活動を通じた学習の構成に関して、第１に、その捉え方について、第２に、そうした学習の具体例について講義した。特に、後者については、小学校では「多角形の面積」、中学校では「方程式」の導入場面の教科書紙面との比較を通じて講義した。さらに、カリキュラム構成における算数的活動・数学的活動の位置づけと、そうした活動を通じた学習に寄せられる期待などについて、他国のカリキュラムとの比較、我が国の学習指導要領の記述の分析などによって講義をした。

さらに、午後からの指導案作成に向けて、具体的な算数的活動・数学的活動について、学習指導要領解説の例示とその特徴についても講義した。

（２）指導案作成１(演習・グループ協議)

全体を現在の指導学年毎のグループに分け、当該指導学年の学習内容(具体的な教科書の指導単元)を１つ選んで、そこでの「算数的活動・数学的活動を通した学習」の具体例を構成する予備的作業を行った。尚、２日目には、指導案レベルまで落とし込み、短時間の模擬授業を行うことを予告した。

実際のグループ活動では、(1)単元・学習内容の選定、(2)素朴な算数的活動・数学的活動のデザイン、(3)具体的な教科書紙面との比較、(4)想定される児童・生徒の反応、(5)具体的に設定される目標と期待される目標の達成具合、等の観点を意識させ、講習担当者が適宜グループ活動に入りつつ、助言を行うなどした。

（３）指導案作成１(演習・グループ協議)

１日目のグループ活動の続きを行い、１日目で協議して構成した学習活動を含む指導案を作成し、また模擬授業で使う教材なども作成した。

（４）指導案に基づく模擬授業（演習）

グループで作成した指導案に基づき、学年グループ毎に、具体的な算数的活動・数学的活動が行われる場面を中心にした、模擬授業を行った。模擬授業では、(1)具体的な算数的活動・数学的活動、(2)そうした活動及び活動に基づく学習と指導目標・内容との整合性、(3)児童・生徒役の具体的発言や活動、を中心に講習担当者がコメントをし、また質疑にも応えた。

３、全体の所見

全体で２日にわたる講義・演習（グループ協議を含む）で、受講者の算数的活動・数学的活動とそうした活動を通した学習に対するイメージをかなり明確にできた、という手応えはあった。特に、主体的な活動とそれを生み出すための問題場面や教材設定の工夫などに関して、少なくとも事例を通じた理解は達成できたと思われる。

グループ活動における指導案作成では、学習単元・内容の選定に時間を取り過ぎたり、学習内容についての目標的・内容的理解の不足等、想定内ではあったがグループ協議の進捗を鈍らせる事態も多数あったが、講習担当者もその都度介入して、特に１日目後半のグループ協議の進捗を促す工夫が必要であった（例えば、学習単元・内容の選択については、他の単元と比較して、活動のデザインのしやすさに関して示唆を与え、学習内容についての詳細な理解については、学習指導要領解説に基づくカリキュラムの系統、その数学的背景、有名な教材の紹介などを行った）。

「算数的活動」「数学的活動」という用語自体は新しいものの、その基本的な考え方は、従来からの「児童・生徒の主体的な活動とその反省を通じて、自ら数学を作り出せる」ような、学習デザインの在り方に関わるものであり、多くの10年次教員にとって、そうした学習についての素朴なイメージはあったようである。本研修は、そうした素朴なイメージを、特定の学習内容の学習活動に対して具体化してみるという機会を提供できており、研修目的も概ね達成されるものと考える。

算数

１、目的

・既存の機器やコンテンツを適切に生かすための知識・スキルを習得する。
・数年後に利用可能になると思われる機器を使った授業像について知る。

２、実施内容

（１）「大画面」を生かした授業の工夫について

A. 教師用デジタル教科書の利用

B. 自分で撮影した静止画や動画の利用

Aでは現行の算数の教師用デジタル教科書を使って、 いくつかの学年・いくつかの単元について、実際の授業を想定して扱った。また、 Bに関しては、 静止画に関しては、 内輪差、 テレビ塔、電車のワイパー、 オレンジの切り口など、 実際に小中学校の算数・数学で利用可能な素材を使って、 模擬授業的に扱った。動画に関しては、 駐車場のバーなどを素材として扱った。

（２）タブレット端末をグループでの実験・討議に生かす方法について

A. 作図ツールGCを使った模擬授業

作図ツールGC/html5をiPadで4人に1台ずつ用意し、 5つの教材に関して模擬授業的に扱った。軌跡を扱う例や複数の点の動かし方を問う問題なども扱った。

（３）グループ別の指導事例作成と発表

主として、作図ツールGC/html5をiPadで4人に1台ずつ使う例に関して、 グループ別で指導事例を検討し、 発問や数学的活動に焦点を宛ながら発表を行った。

３、全体の所見

これまで、5年次研修や10年次研修で2日間を使って数学的活動に焦点を当てながら実施してきた。数学的活動との関わりの中でICT利用を扱ってきたのに対して、今年度は2日間の研修を3日に拡充し、その中の1日を特にICT利用に焦点を当て、その日を私が担当することになった。これまでは初日の後半と2日目の前半で指導案作成を行い、2日目後半で模擬授業のスタイルでの発表を行ってきたが、今回は指導案を作成せず、指導事例についてグループで協議し、発表するスタイルに変えた。

まず、ICT利用に関しては、模擬授業のスタイルで実感してもらうことは適切であると感じた。特にタブレット端末はまだ学校に整備されていないため、今後の授業のあり方を考える上では有効であった。また、単に受け身で話を聞くだけでなく、指導事例について協議・発表することは主体的な参加を求める上でも意義があった。今後、学校の中でのミドルリーダーとして機能していく上でも、校内での研修を進めていく上でのノウハウを身につけるという意味でも有効であったと考える。

社会科教育

1　目的

・社会科における指導と評価の一体化という視点から、生徒主体の学習活動を企画・実践するための基本的な理論の習得と技能の向上を図る。

・問題解決的な学習を充実させるために、講義、研究協議、授業づくりを組み合わせ、グループで協働して取り組むことで、理論と実践の両面から学びを深める。

2　実施内容

（1）　講義　問題解決的な学習への授業改善【9:50-10:30】

（2）　実習　問題解決的な学習の充実を目指した授業づくり

【単元構想の作成 10:30-12:00】

〔内容〕以下の内容で、問題解決的な学習を踏まえた単元構想を作成した。

・小３：店で働く人々の仕事

・小４：特色ある地域の人々の生活

・小５：工業生産を支える貿易や運輸

・小６：明治維新と人々の働き

・中１：（地理的分野）世界の様々な地域

・中２：（歴史的分野）開国と近代日本

・中３：（公民的分野）現代の民主政治と社会

〔単元構想の留意点〕

① 学習問題を共有する指導（学習への動機付け、問題意識の醸成、追究の意欲）

② 学習問題に即して調べ、まとめる指導（追究の見通し、学習問題に対する予想、資料の収集、見学・聞き取りなどの現地調査、調べたことの整理、まとめ）

③ 学習問題の解決に向けた思考・判断・表現活動（個々の対話や学級全体での話し合い、共通点・相違点・比較・判断場面の設定、根拠や解釈を示しながら考えを説明、再考）

【模擬授業の指導案作成 13:00-16:10】

〔内容〕午前中に作成した単元構想の中から代表を選び、模擬授業の指導案を作成した。

・模擬授業の場面は、問題解決的な学習の「導入」や、学習問題の解決に向けた「思考力・判断力・表現力」を高める場面の中からグループで選択して実施した。

・模擬授業の指導案・教材の作成は、全員で協力して行った。

・模擬授業の発表は、役割や場面で分担を決め、全員が教師役を行った。

（3）　講義　社会科教育における指導と評価【9:40-12:00】

〔内容〕

① 社会科の問題は、答えが一つではない。（答えが一つではない問題）

② 社会科の問題は、一人で解決しない。（友達と一緒に考える問題）

　社会科が担う市民的資質は、複数の人間の対立を民主的・平和的に乗り越える資質。

③ 社会科の問題は、身近なところから、世界の問題につながっている。

④ 答えが一つではない問題の場合、多様な視点を生徒から学ぶ。

現場の声から改善された評価の４観点

（4）　研究協議　私の授業への取組【13:00-16:00】
〔内容〕
新学習指導要領で求められている「問題解決的な学習の充実」に関する自身の実践を報告し、全体で協議することにより、授業を振り返り、客観化する視点を磨いた。その際、「新たな教材を創造する」とはどういうことか、「新たな教材を創造する」ために必要な要件は何か、また、その必要性についてグループや全体で議論をした。
（5）　演習　模擬授業の準備【9:40-12:00】
（6）　演習　模擬授業の発表【13:00-16:00】
〔実習の流れ〕
＜小学校＞（6 班構成）模擬授業発表（各班 15 分）感想交流（各班で 5 分、全体で 5 分）、講師からの助言（20 分）
＜中学校＞（8 班構成）模擬授業発表（各班 15 分）感想記録（各班 3 分）、最後に感想記録の交換（10 分）、講師からの助言（20 分）

３　全体の所見
3 日間にわたる研修では、総合教育センターの研究指導主事と大学教員とが互いの強みを発揮しながら連携することで、理論（知識面）と実践（技能面）の融合を図る研修プログラムを実施することができた。受講した教員の感想の多くは、グループで単元構想、指導案作成、模擬授業発表を行うことで、問題点が明確になり、多くの改善点を学び取ることができたと述べている。また、問題解決的な学習に取り組む上で、子どもたちに何を気付かせ、何のために調べさせるのか、授業のねらいを明確にし、子どもに問題意識を持たせることの重要性を感じ取っていた。10 年経験者研修を一つの区切りとして、改めて教師自身が学び、見識を高めていく必要性を認識し、自分自身のこれまでの授業を振り返り、反省する契機となっていた点は評価でき、研修の目的は概ね達成されたと考える。

音　楽
１．目的
学校教育現場において今後ミドルリーダーとして若い教員を導く立場に就くことを自覚し、中堅教員としての知識と力量を高めることを目的とし、主に次の事項に配慮しながら講習を実施した。
① 学習指導要領（音楽科）で求められている内容について正しい理解を深める。
② 学習指導要領が求める「言語活動によって思考を導き出す活動」を音楽科授業の中で展開するために必要となる「教え込み型」の指導から「サポート型」の指導への転換について理解を深める。
③ 学校教育の一環として行われる音楽科授業の評価について、文科省を初めとする様々な機関から出されている文書に基づき理解を深める。
④ 学校内の他の教員から見た音楽科教員や音楽科授業の印象、児童や生徒から見た音楽科教員や音楽科授業の印象、児童や生徒は音楽科授業に何を求めていたのか、どのような授業を「分かる授業」として感じていたのか、その他様々な資料を参照しながら教科としての音楽科の立ち位置について省察し、情報を共有する。
⑤ 以上の項目を振り返りながら、学校教育の一環として行われる音楽科授業のあり方について、受

講者各自が根拠に基づいた自分なりの考え方を持ち、それについて説得力を持たせて説明できるようにする。

⑥ 学習指導要領（音楽科）の中で、その取り扱いが喫緊の課題である「音楽を形づくっている要素（音楽を特徴付けている要素、音楽の仕組み）の指導法について、受講者が日常の授業の中で工夫していることを報告し合うことで、情報の共有を図る。

２．実施内容

（１）音楽科教育、音楽科授業のあり方（講義）

様々な資料を提示し、学習指導要領（音楽科）が求めている指導内容を一つ一つ押さえながら確認し直すことで、音楽科授業の方向性について概説した。合わせて関係各機関の行ったアンケート調査の結果を提示し、学校内の他の教員から見た音楽科教員や音楽科授業の印象、児童や生徒から見た音楽科教員や音楽科授業の印象、児童や生徒は音楽科授業に何を求めていたのか、児童や生徒はどのようなタイプの授業を「分かる授業」として感じていたのか概説した。

（２）音楽科授業スキル①　コーチング（講義）

学習指導要領が求める「言語活動によって思考を導き出す活動」を音楽科授業の中で展開するために必要となる「教え込み型の指導からサポート型の指導」の脱却について概説し、意識改革を促した。ここでは特に、一般のピアノ教室や部活動の吹奏楽の指導などで注目を集めているコーチングを取り上げて、その基本知識と基礎的なテクニックについて概説している。

（３）音楽科授業スキル②　グループダイナミクス（講義&協議）

前時に引き続いて、学習指導要領が求める「言語活動によって思考を導き出す活動」を音楽科授業の中で展開するために必要となる「教え込み型の指導からサポート型の指導」の脱却について概説し、意識改革を促した。ここでは特に、部活動の吹奏楽の指導などで注目を集めているグループ･ダイナミクスを取り上げて、その基本知識と基礎的なテクニックについて概説している。

（４）歌唱活動と合唱活動へのコメント付け（演習）

筆者が用意した音楽科授業の一場面を模したアニメ・ビデオを用いながら、受講者が児童役と教師役を交互に担当しながら、書面にコメントを記す方法で指導の言葉を吟味・推敲する演習を行った。その際、どのような言葉を用いたら、どのような反応を得られるかに注目し、相手から様々な反応が返ってくることに意識を向けるよう促した。

（５）音楽科授業のあり方　自己評価カード（講義）

学校教育の一環として行われる音楽科授業の評価について、文科省を初めとする様々な機関から出されている文書に基づきながら概説した。ここでは特に、従来行われてきた感想や懺悔の言葉を書かせる自己評価カードから、児童や生徒自らが授業の方向性や活動の目標を意識することができ、さらに「何をどのように創意工夫し、何を学び、何を身につけたのか」、具体的に省察できるようなワークシート型の自己評価の具体例を紹介した。

（６）授業づくりアイデアワークショップ①教材の作り方（講義）

これまでに触れてきた内容を振り返りながら、学校教育の一環として行われる音楽科授業のあり方について整理した。さらに、ここでは音楽科授業の中で使用される教材や教師自らの手で作成する教材について、その使用法や使用に際して配慮すべき点、場面に応じた使用条件などについて概説し、講習のまとめとして行うワークショップにおいて筆者が何を求めているのかを説明した。

（７）授業づくりアイデアワークショップ②音楽ゲーム（演習）ロールプレイング

学習指導要領（音楽科）の中で、その取り扱いが喫緊の課題である「音楽を形づくっている要素（音楽を特徴付けている要素、音楽の仕組み）の指導法について、受講者が日常の授業の中で工夫していることを報告した上で、実際に活動場面を再現することで情報を共有し、意見交換も行った。その際、これまでに触れてきた内容を振り返りながら、投げかける言葉を吟味し、教材としての条件を満たしているのか再確認するよう促した。

（８）授業づくりアイデアワークショップ③音楽ゲーム（演習）ロールプレイング

学習指導要領（音楽科）の中で、その取り扱いが喫緊の課題である「音楽を形づくっている要素（音楽を特徴付けている要素、音楽の仕組み）の指導法について、受講者が日常の授業の中で工夫していることを報告した上で、実際に活動場面を再現することで情報を共有し、意見交換も行った。その際、これまでに触れてきた内容を振り返りながら、投げかける言葉を吟味し、教材としての条件を満たしているのか再確認するよう促した。

３．全体の所見

受講者から返ってきたアンケートや受講者との意見交換などによると、講習の目的として設定した６項目について、概ね受講者の理解を得ることはできたと考える。しかし一部の受講者から「理解はできても、一部同意できない部分もある」との率直な声が返ってきたことから、今後「歌わせているだけでは音楽科としての授業として十分ではない」ということを説得するだけの材料を筆者が用意する必要性を感じている。

講習の目的として掲げた項目のうち、①から③については、今後若手教員を指導する場面で必須の知識として熟考し身につけることの必要性を促したと考える。④と⑤については、今後中堅教員として何が求められ、若手教員を指導する上で学校内においてどのような立場に置かれるのか、自身の姿を改めて考える機会になったと考える。⑥については、現行の学習指導要領（音楽科）の新出事項であることから多くの教員が悩み、各地の授業研究会でも取り上げられているが、指導の際に何に配慮し何を大切にして教材化や授業化を図るのか、再確認することができたと考える。

ミドルリーダーとして必要な知識と力量を高めることを目的として研修を設定したが、受講者の省察を促したことから、研修の目的は概ね達成されたと判断している。

生活科

１．目的

今次学習指導要領改訂で、生活科の目玉になった下記の事項について、講義や実践事例の紹介、ワークショップ等を通して理解を図る。

・科学的な見方や考え方の基礎を養うとは
・生活科における言語活動の充実のポイント
・「自分自身への気付き」についての重要性

２．実施内容

（１）科学的な見方や考え方の基礎を養うとは(講義)

次の３点について講義した。

① 幼児教育から生活科そして中学年理科につながる「科学的な見方や考え方」の育成の系統性について
② 気付きの質を高めるための「見つける」「比べる」「たとえる」などの学習活動について
③ 特に、内容（6）「自然や物を使った遊び」における「比べる」「試す」「繰り返す」学習活動

を通して、科学的な見方や考え方の基礎を養うことについて

（２）生活科における言語活動の充実のポイント（講義）

生活科の指導経験のある教師約50名を対象にした生活科学習における言語活動についての調査、国語科及び生活科の教科書数社の調査をもとに執筆した「生活科における言語活動の充実の可能性について」（愛知教育大学生活科教育講座紀要「生活科・総合的学習研究」第10号、2012年）を資料として、実態に応じた言語活動導入の方策について講義した。

（３）「自分自身への気付き」についての重要性(講義)

「自分自身への気付き」は、この度の改訂で、生活科の「学年の目標」に追加されたほどの重要事項である。子どもが、活動を通して、自分のよさや可能性に気付き、意欲と自信をもって生活することができるようにすることを目指している。ここでは、「自己肯定感を高める生活科学習の理論と実践に関する研究」（愛知教育大学研究報告第62号教育科学編、2012年）をもとに、執筆した大学院生を交えて、講義をした。

（4）科学的な見方や考え方を養うおもちゃづくり（ワークショップ）

「簡単工作 100 選」のＨＰを紹介した。この中から「ゴムロケット」を選び、実際に、どのように工夫したら、教室の前から飛ばし、後ろの壁まで届くかを試行錯誤しながら製作してもらった。

（５）自分自身への気付きを養う実践事例の検討（話し合い）

県内外の内容(9)「自分の成長」にかかわる単元の事例を紹介した。また、この単元で活用できる以下の絵本も紹介した。特に、「自分自身への気付き」の一つである「自分の心身の成長への気付き」には、「身体的」「能力・技能的」「精神的」の三つに分けられることを提案し、それぞれの実践の中での子どもの姿を出し合い話し合った。

３．全体の所見

受講者の「研修全体の感想」を以下に抜粋する。

・ 実際に「おもちゃづくり」を体験させていただき、生活科の楽しさや面白さを実感することができた。講義の中で、教師としての声掛けや発問について具体例をもとに話していただいたので、とても勉強になった。
・ ワークショップで行ったことは、２学期の実践で取り上げたい。「気付きの質を高める」ということが漠然としていたが、講義を聞いてクリアになった。
・ 生活科では、「教師も楽しむ」とよく言われますが、まさにそのとおりだと実感した。さらに、「自分自身への気付き」についても理解が深まり、２学期以降の単元の中に組み込みたいと思う。

大学での研究成果である論文や開発したHPなどをもとに、学習指導要領の改訂事項の中で、特に重要な内容について扱ったことで、上記のような感想を引き出せたと思う。大学院生との交流も互いによい刺激になったと思う。少人数であったことが、互いの距離を縮め充実した時間を過ごすことができた。

保健体育

１，目的

学習指導要領に準拠した体育・保健体育科に対する省察的フレームワークの形成に寄与する。

・教育課程のフレーム；学習指導要領の目標理念で考えるフレーム。
・教科指導のフレーム；授業構想・実践・評価についての分析的フレーム。
・自己組織性のフレーム；自分の力量形成、勤務校や地域の教育実践を活性化するフレーム。

２，実施内容

（１）自分の実践を変える視点(講義)

次の3つのテーマについて講義した。 ①これまでの体育とこれからの体育、②教師力量形成研究の知見、③運動が「できる」メカニズム。

①では保健体育科における目標・内容について、学習指導要領の変遷の過程（学制の施行から現行まで）について講義した。これをもとに現行学習指導要領の改訂の要点を説明し、その趣旨を反映する指導法について事例をもとに講義した。
②では教師力量形成・教師発達の種々の研究結果を提示し、保健体育(体育)担当者として自己成長を促すための視点と方法について講義した。
③では体育の指導法のうち、特に運動技能の指導に焦点を当て、その効果的な方法や新しい視点について講義した。

（２） 授業分析(演習)

フリーカード法による授業分析演習を実施。演習では授業VTRを視聴し、受講者が思いつくままにフリーカード（付箋紙）にコメントを記述する。各コメントを4，5人一組のグループで持ち寄り、KJ法を参考に集約した。集約結果をグループごとに発表し、授業批評を行った。この演習の目的は、授業観察の視点の偏向を自覚させるものである。コメントのほとんどが、教師行動と授業運営マネジメントに偏っていた。授業の構想・内容についてのコメントは現行の教育課程から妥当性を問うものが若干あっただけだった。ここでは、10年経験者の授業への関心が「技術的実践」（授業遂行能力）に偏っていることが自覚された。言い換えれば、10年経験者でも教育課程を遂行する受動的な態度にあり、教師自己成長への能動性が期待できない。そこで、次の授業分析演習(2日目)でフレームを転換させることを予告した。

（３）ワークショップ①「個人的スポーツの動きづくり」（講義）

このセッションでは、陸上競技・器械運動・水泳の3領域について新しい指導アイデアの事例を提示。アイデアは、運動技能の向上を図るための視点・現状の問題点を解決するための指導観・新たな授業を創造するための考え方を示した。運動技能の向上では現象学的な視点で動感形成のための運動課題を導入すること。現状の問題点を解決するための指導観では、教師のもつ潜在的カリキュラムの提供の可能性に留意すること。新たな授業を創造するための考え方では、常識破壊として工夫した実践が成果をあげていることを事例を交えて紹介した。

（４）Q&A資料による協議（演習・グループ協議）

Q&A資料とは「体育に関する実践上の問題」「体育に関する質問」として受講者から事前に提出された質問について研修講師のコメントを付した資料である。質問総数は114問、具体的な指導法についての質問がもっとも多く、教育課程の内容と評価に関する質問が次に続く。指導に関する質問にはワークショップで説明できる内容を除き、受講者のアイデアを拠出した。また、教育課程・評価に関する質問では研修講師の講義で相互に理解を深めることができた。

（５）ワークショップ②「球技・武道の指導アイデア」（講義）

球技・武道の共通点は対人的スポーツにある。また、体育授業では試合における競争相手は学習における共同仲間になる。これを両立する指導アイデアについて講義した。特に、試合経験による学習が不可欠とし、全員の試合参加、技能発揮を保障する授業の在り方について事例も交え講義した。
さらに、安全上の問題が問われる武道の指導について、各地・各校で採用される対応の欠点を指摘し、より安全な指導について講義した。

（６）コーディングによる授業分析(演習)
この演習では、まず「授業観察」を「運動観察」に切り換えた。ここで「授業観察」とは授業全般を捉えるという観察に対し、「運動観察」は体育における子どもの運動(技能発揮)を観察するものである。
子どもの技能発揮を運動局面で捉え、これを局面ごとに分割したり、形態などの特徴をコーディン

グ（象徴的なキーワードで表す）する。特にコーディングでは規格化した視点を設けない。受講者それぞれの感性から導いたコードで記述し分析してもらうこととした。

分析結果を出し合い、それをフォーカスレベルによって分類し集約した。フォーカスレベルとは、観察した運動局面を表す際、遠近により区分する水準のことである。このレベルには「一連の動きを捉える」「身体全体の形態を捉える」「身体部位の一部を捉える」などの形態的なレベルや「行為目的を推察して捉える」「恐怖心の有無を推察して捉える」などの内的な推察を含む。

集約は4、5人一組で行い、構造化(作表による構成表記)して示した。各グループで結果を発表し、授業成果や授業改善についての意見を交換した。あわせて研修講師がコメントした。

３，全体の所見

2回の授業分析演習で、受講者の省察フレームの偏向を自覚させる手応えはあった。特に、技術的実践において長けている(授業を巧くできる)と自負していた教員にとって自省の機会になった。

ワークショップによるアイデアの紹介は、受講者のマンネリ化された実践を見直す「常識破壊」のきっかけになった。中でも実践上の問題を外部条件(学校施設や生徒)に帰し、自らの方法を続けようとする考え方を改める機会になったようである。

基本的に10年次教員は今後の学校ミドルリーダーとして期待される存在である。そのため、自己成長を促すことが求められる。本研修は教師自省性の機会を提供できたので、研修目的は概ね達成されるものと考える。

保健体育(ダンス実技)

１，目的

今回の研修では、ダンスの指導スキルを身につけさせることに加えて、ダンスの動きを見ること、新たな教材を考えるきっかけを与えることを目的とした。

２，実施内容

（１）指導のスキルアップを目指す（講義）

次の3つのテーマについて講義した。 ①ダンスの歴史的変遷、②ダンスで取り上げる内容の特性とねらい、③創作ダンスにおける動きをみる視点。

①では現在のダンス教育に至るまでの歴史的変遷を辿った。なぜダンスが教育に必要なのかをダンスの根源から解説することより、ダンスの教育的価値を示した。

②では表現運動・ダンスで取り上げる内容の特性とねらいを講義した。ダンスには多種多様な種類がありこれらのダンスを分類することにより、学校で取り上げる表現系、リズム系、フォークダンスの特性を理論的に説明した。

③では実際に創作した作品を鑑賞し、評価するという活動を行なった。6作品を鑑賞し、それぞれの作品に点数をつけ、よかったところ、改善した方がよいところを記入し、グループごとで話し合った。そして、何をどのように見たらよいのかのポイントを講義した。

（２） 表現運動・ダンスの授業を創るには(実技)

実技を通して表現運動・ダンスの指導法を提示した。いくつかの教材を実際に体験し、教材を考えていく上でのポイントも踏まえながら行った。

小学校・中学校の先生方の研修では、伝承遊び等を使ったウォーミングアップを重点的に行い、サンバとヒップホップのリズム系のダンス、新聞紙を使った表現系のダンスを行なった。特に導入では誰でも簡単に出来て指導もしやすいものを提示し、ウォーミングアップの重要性を説明した。

高校の先生方の研修では、振付になりがちのリズム系のダンスの授業の認識を変えるために、自由にのれるダンスの指導法を示した。さらに、即興表現から作品に繋がるように椅子を使った作品創作も行った。

３，全体の所見

今回の研修会では、ダンスの指導スキルを身につけさせることに加えて、ダンスの動きを見ること、新たな教材を考えるきっかけを与えることを目的とした。

ダンスはゴールフリーな領域であり、何ができればよいのか、どのような子どもの姿になればよいのかわからないという声をよく聞く。そのため、ただ単に指導法を与えるだけではなく、どのような視点で子どもの動きを見ればよいのかを実際の映像を用いながら解説することにより、より現場の問題に近い内容の講義をすることができたと考える。

さらに、実技では実際に教師が見本を提示するばかりではなく、児童・生徒から引き出す方法、即興から作品創作につなげる方法を提示することにより、今までのダンスに対する認識を変えることができたのではないかと言える。

家庭科

１，目的

・家庭科の特質である「実践的・体験的活動を通して学ぶ」，「五感を使って学ぶ」，「課題解学習を充実させる」ことの意味と教育的価値，並びに実際の方法や単元における位置について実際に体験して再考し，これまでの実践をリニューアルするパースペクティブを得る。

・新たに求められている「伝統・文化を学ぶ」あるいは「言語活動の充実」を家庭科ではどのように捉え，実践するとよいのか，具体的に実践例において検討し，家庭科のカリキュラムや内容・方法を捉える枠組みを再考する。

・さまざまな価値観や家庭環境・地域環境で生活している子どもの現状を交流し，家庭科の実践的枠組みを捉え直す。

以上を実験・実習や，ものつくり，模擬授業，リニューアルプランの作成などを通して，具体的に検討する。各校に1人であることが多い家庭科教員の現状を踏まえ，実践や意見を交流する機会を増やすとともに，共同で実践のリニューアルに取り組む機会をつくる。

（家庭科の研修では，大学教員が大学で実際に担当するのは3日目であるが，１日目と2日目の研修内容についてもコーデイネートした。）

２，実施内容

１・２日目　センターでの研修

（１）「実験・実習を通して学ぶ」を再考する（実験・実習の体験）

・　調理実習・調理実験の体験と考察；栄養素の検出実験としてビタミンCの検出実験の体験；一尾丸ごと調理（いわしの手開き）をひとり三尾行い，３種類の方法で調理を体験する。ひとり魚３尾丸ごと調理の実習の方法や段取りに加え，子どもの魚への興味を引き出し，「またやってみたくなる」／「やれそうな気がする」実習と技術の習得をめざすあり方を体験から考える。

・ 被服製作実習の体験と考察；あづま袋，端切れやお菓子のパッケージを使ったくるみボタン2枚の布から袋，あづま袋のアレンジ，アイスカップを使ったソーイングボックス，フェルトコサージュの製作を体験する。時間数が少なく，また針と糸と布を使っての製作体験はもちろんのこと，製作する様子を目にした子どもが少ないなかで，子どもたちがまたやってみたくなる「針と糸と布などを用いた製作実習」を体験し，「自己を表現し，つくる喜びや達成感のある実習教材」を捜す視点を得る。

（２）　幼児との交流実習（中学校保育の柱）の多様なモデル・方法・実施ポイント（講義）

新学習指導要領では，幼児との交流実習が必修とされたため，幼稚園・保育園への訪問をはじめとする多様な実習・交流の方法で取り組む必要がある。多様なモデルを知るとともに，実施の際のポイントを交流し，検討する。小学校の教員は，中学生が何をどのように学ぶかを知り，小学

校における「自分と家族」の実践構想を検討する。

３日目　　大学での研修

（１）自分の実践を変える視座を学ぶ

１）模擬授業「家庭科の授業開き：ホットレモンで乾杯！」を検討する（ワークショップ）。家庭科の「授業開き」を実際に模擬授業で体験し，「実践的・体験的活動を通して学ぶ」，「五感を使って学ぶ」，「課題解決学習を一層充実させる」とはどういうことかについて考察し，また現代の生活現実や課題を反映した家庭科の授業構想のための視座を得る。研修では，事前にレモンの市場調査をしてきてもらい，その情報交流から始める「ホットレモンで乾杯」の模擬授業を行い，以下の点を検討した。①現代の生活課題の一つである，食材の安全性や環境問題との関係などを，レモンの市場調査の体験や，その結果の交流により考察し，食のグローバル化に伴い生じている食品を取り巻く現代的課題を捉える枠組みを検討し，現代的課題を把握する。②実際に，輸入レモンと国産レモンを比較し，子どもたちが「見えるもの」から「見えないもの（生活の課題）」を発見していく教材のあり方や教材研究の方法を考える。③レモンでホットレモンをつくってみる体験から，子どもが五感を使って，生活とその課題について，追求・発見し，検討していく家庭科の独自性について，体験を通して考察する。④家庭科あるいは食で学ぶ全体的な枠組みを伝えることができる「授業開きのあり方」を体験し，「消費者のまなざし」だけでもなく，「生産者のまなざし」だけでもなく，生活を全体として捉え検討できる「生活者」を育成する視座について検討した。

２）他の実践例から考える（講義）

「実践的・体験的活動を通して学ぶ」あるいは「五感を使って学ぶ」とはどういうことか，また「言語活動の充実」をどのように捉える必要があるのかについて，他の実践例から解説し，検討した。加えて，近年の多様な価値観や家族・地域の多様性を前提に，多様であるからこそ，子どもたちが価値観や現状を交流し，子どもが共同で検討する授業をどのように実現してくかについて検討した。

３）上記の視点と学習指導要領の改訂要点との関係を捉える（講義・交流）１日目と２日目の体験を捉え返し，年間指導計画や単元構想に位置づけ直せるように上記の視点と学習指導要領の改訂要点との関係を解説し，受講者同士で検討してもらった。

（３）家庭科授業のリニューアルプランの作成・交流・検討（授業研究・授業づくり）；事前に受講生に課してあった家庭科の実践報告あるいは単元や授業の構想プランのレポートの中から，各自が１～２本を選択し，リニューアルプランを考えてきてもらう。小グループに分かれ，考えてきた改善案を交流し，一つを選び，グループでリニューアルプランを作成する。今回は，食に関するもの，伝統・文化に関するもの，被服に関するものを扱うグループをつくり，2日半の研修で学んだ視点や活動を活かして，リニューアルプランを構想した。全体で各グループのリニューアルプランを検討した。

３．全体の所感

３日間の研修内容をコーデイネートしたので，研修が相互につながり，家庭科の授業を捉える枠組みや，実験・実習などの体験的活動の位置づけ，教材研究の方法などが捉え返されたようである。特に，3日目の授業開きの模擬授業と，リニューアルプランの作成と検討は，受講生の評価が高かった。家庭科教員は，各学校にひとりであることが多く，他教科のように，教科専門の者が集まり，日常的に校内で授業を分析し，指導案を検討できるわけではない。受講生にとっては，家庭科専門の者同士で踏み込んで語り合えるまたとない機会になったようである。作成してきたプランや実践をさらに共同でリニューアルするという仕組みが，深く踏み込んだ検討を促した。それでもなお，「伝統文化」をどのように解釈し，具体的に実践に反映するかについては難解であったとのコメントがあり，さらに研修の手立てを考える必要がある。

５．評価

１，評定尺度の結果

表1　研修の理解度、満足度の4段階評価の平均

理解度(全体)	3.5	満足度(全体)	3.8
国語	3.1		3.6
数学	3.6		3.6
社会	3.6		3.7
音楽	3.9		4.0
家庭科	3.5		3.9
生活科	3.6		4.0
保健体育	3.5		3.7

全ての平均値が３～４の間になり研修の理解度･満足度ともに一定の成果が認められたものと考える。

２，感想(自由記述)の分析　(テキストマイニングの結果)

自由記述データに対して形態素解析を行った。これを表2に示す。

表2　形態素解析の結果

教　科	データ件数	単語総数
国語	136	1689
数学	211	3099
社会	236	2981
音楽	90	1766
家庭科	47	591
生活科	30	694
保健体育	547	8893

上記データのうち、以下の①から③の条件でキーワードを抽出した。キーワードは研修成果を意味する語として、これを分析対象とした。

① 成果を意味する文脈

・完了の助動詞「た」に付く自動詞をキーワードとする。「なった」「わかった」など。

例）「自らの実践を振り返るいい機会になった。」

② 刷新を意味する文脈

・意志の助動詞「よう」、希望の助動詞「たい」に付く動詞をキーワードとする。

「～しよう」「～したい」(助動詞)　「と思う」「と感じた」（動詞）など。

例）「研修で考えた内容を2学期から実践してみようと思う。」

「今までのやり方でなく、今回聞いた方法を試してみたいと感じた。」

③ 自省を意味する語

・自己を対象化する語をキーワードとする。「自分」「自ら」「今までのやり方」など。

例）「自分の考えがあまいことに気付いた。」

表3にキーワードの出現頻度を研修形態別に示す。

表3　「成果、刷新､自省」語の頻度

	成果	刷新	自省
総計	1843	3440	1602
講義型（含ワークショップ）	1102	2278	1059
演習型（含協議・実技）	741	1162	543

講義型での出現頻度が演習型よりも高かった。大学との連携よる教員研修は、「大学知」の提供ができ、受講者に新たな「知」が認識されたのではないかと推察する。そのため、成果・刷新・自省を促す機会になったのではないかと考える。一般的に講義型研修のマンネリ化、飽きが受講意欲を損なうとの考えがあり、その反省から、多様な演習型研修形態が注目されている。しかし、講義型の形態でも「知」の内容によっては受講者にとって有益なものになるとの可能性が示唆される。

３．１０年経験者研修（教科指導研修等）の状況（受講者の事後アンケートから）

(1) 国語科　受講者６５人（小・中）
・「よい」「ほぼよい」と答えた割合は、ともに９８％

(2) 社会科　受講者１３６人（小・中・高・特）
・「よい」「ほぼよい」と答えた割合は、理解度は９９％、満足度は１００％

(3) 算数・数学科　受講者５４人（小・中）
・「よい」「ほぼよい」と答えた割合は、ともに１００％

(4) 生活科　受講者５人（小）
・「よい」「ほぼよい」と答えた割合は、ともに１００％

(5) 音楽科　受講者１０人（小・中）
・「よい」「ほぼよい」と答えた割合は、ともに１００％

(6) 保健体育科　受講者４１人（小・中）
・「よい」「ほぼよい」と答えた割合は、理解度は９７．６％、満足度は１００％

(7) 技術科　受講者１人（小・中）
・「よい」「ほぼよい」と答えた割合は、ともに１００％

(8) 家庭科　受講者８人（小・中）
・「よい」「ほぼよい」と答えた割合は、ともに１００％

６．　今後の課題

（１）１０年研の講義、演習の内容は、対象者の教師としての発達を考えると、指導方法の再構築が目的になる。その点で、大学教授や大学を会場に行われる研修は、現場からの講師よりも、現代の潮流やより新しい情報を基に行われ、よりニーズに合った研修になることが期待できる。今後も研修を充実させるために連携回数を増やしながら、継続させていただきたい。

（２）免許更新講習と１０年研は、研修内容を連携する必要がある。研修の目的が似ており、研修年度も近いため、相乗効果を期待できるが、研修内容が重複する可能性もある。これらを避けるために、免許更新講習、１０年研の教科指導研修を連携する必要がある。

（３）教科以外の領域についても連携を図りたい。特に、道徳教育や学級活動などのｅラーニングコンテンツ作成について検討する必要がある。

（４）ＩＣＴ機器の利用に関わる講義・演習は、学校現場でも使用頻度が高まっているため、各教科において取り扱っていくことが課題である。